

人工アワビ礁効果調査

小島 博・田原 恒男
中久 喜昭・松岡 正義

アワビ類の資源培養を目的とした漁場（増殖の場）および漁獲量の増大を目的とした漁場（生産の場）造成試験のため前年度沈設したブロック類がアワビ類の住み場（人工アワビ礁）として適しているかどうか効果調査を行なった。

1. 調査方法

潜水夫（ヘルメット式潜水器使用）がアワビ類およびその他の動物を観察・記録した。

調査場所 海南町浅川

調査時期 昭和45年6月・12月

2. 結果

浅川地先に沈設した円型ドーム型ブロック（6個）、N型ブロック（28個）および割石（49個、各1屯）にはクロアワビ・メガイアワビ・トコブシ・イセエビ・ウニ類などの住み場となっているのが観察された。これらの動物の3カ月後および9カ月後における観察数の変化を表1に示した。

表1 人工アワビ礁における動物数の変化

アワビ礁	動物種類	3カ月後	9カ月後
ドーム型	クロアワビ	2	1
	メガイアワビ	2	3
	イセエビ	0	2
	ウニ類	—	多数
N型	クロアワビ	0	3
	メガイアワビ	2	16
	トコブシ	0	8
	ムラサキウニ	—	18
	アカウニ	—	26
	バフンウニ	—	2
割石	クロアワビ	0	0
	メガイアワビ	2	6
	トコブシ	0	8
	イセエビ	0	1
	ウニ類	—	多数

人工アワビ礁の造成試験を行なった場所の底質は砂・礫から成り、造成以前にはアワビ類の生息に適しない場所であった。表1から明らかなように、3カ月後にはアワビ類の発見数は少なかったが9カ月後には増加した。9カ月後の動物数はドーム型ブロック6個、N型ブロック17個および割石6個の観察結果である。ブロック1個あたりのアワビ類の発見数は、割石で最も多く2.33個、次いでN型ブロック1.59個、ドーム型ブロック0.67個の順であった。

アワビ類・イセエビ・ウニ類の住み場はブロック類と海底との間、ブロック類の接した狭い間隙で、ブロック類の表面にはほとんど見られなかった。

ドーム内にはイシダイ・イシガキダイ・メジナ・ニザダイ・ネンブツダイ類・ペラ類・クロダイ

などの魚類が観察された。

3. 考 察

前年度沈設したドーム型ブロック、N型ブロックおよび割石の人工アワビ礁としての効果調査を実施した。これらのブロック類を利用する動物は時間経過に伴い増加していると考えられた。

ブロック類のアワビ礁としての効果を、9カ月後のブロック1個あたりの発見数で判断すると、割石・N型ブロック・ドーム型ブロックの順であった。アワビ類の微生物所（個体の付着している場所）は狭い間隙に形成されるので、人工アワビ礁により漁場を造成するにはブロックの形態がアワビ類の住み場として適すると同時に、ブロックの配置にも注意を払う必要がある。

来年度以降もこれらのブロック類とアワビ類の住みつき数の関係、アワビ類の付着場所などの観察を継続する。